

本市の全国学力・学習状況調査結果概要

令和4年12月

本調査の目的は、全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童生徒の学力や学習状況をきめ細かく把握・分析し、その成果を検証して学習指導の改善を図ることなどであり、平成19年度から文部科学省が実施しているものです。今年度の調査は、4月19日に悉皆で行われ、本市では、全校にあたる小学校13校（6年生483名）、中学校10校（3年生534名）が参加しました。

調査内容は、国語、算数・数学に加え、今年度は理科も実施され、3教科の調査となりました。また、学習習慣や生活習慣等に関する児童生徒質問紙調査は、昨年度より小学校、中学校とも同一の質問数、質問事項となりましたが、今年度はICT機器活用についての質問事項が増え、活用場面毎のICT機器の使用頻度等について問う内容となっています。児童生徒対象の質問紙調査に加え、各校の校長が回答する教育環境等に関する学校質問紙調査も実施されました。

本県は今年度も全国トップクラスに位置している中、本市の小・中学校は、国語、算数・数学、理科の多くの設問の平均正答率で全国を上回っており、全体的には基礎・基本となる力がついているといえますが、平均正答率が全国を下回っている設問は「思考・判断・表現」を観点とする項目が多いという結果になっています。また、学校間の正答率の開きも見られることから、個別最適な学びと協働的な学びを一層充実させ、それらを往還しながら深い学びにつなげていく必要があります。

小学校において、各教科の平均正答率が全国を上回っています。国語では、特に感想や意見を伝え合うことによって自分の文章のよさを見つける力の定着が見られます。しかし、物語を読み、具体的な叙述を基に理由を明確にして、自分の考えをまとめる力に課題が見られました。算数では、目的に応じて表やデータを読み取り、特徴や傾向を考える力は定着しているといえますが、日常生活の場面に即して数量の関係について考察する問題などについては課題が残りました。理科では、課題解決に向けて、より妥当な方法を検討し、改善する力がついてきていると考えられますが、事象や観察結果を複数の視点で分析・解釈し、自分の考えをもつことに課題が見られます。

中学校においても、各教科で平均正答率が全国を上回っています。国語では、聞き手の興味・関心などを考慮して、表現を工夫して書く力が付いている反面、表現の技法の名称や使い方を理解し活用することに課題が見られました。数学では、予想した事柄が成り立つ理由を筋道を立てて考え、説明する等、事象を数学的に考察する力に定着が見られますが、データやグラフを適切に読み取り、その特徴を捉えることに課題が残りました。理科では、身に付けた知識と日常生活における経験を関連付けて考える力が定着してきていると考えられる反面、時間的・空間的な見方を働かせ、規則性や関係性を見いだしたり、結果を推察したりする力に課題が残りました。

質問紙調査からは、小・中とも、学習した内容について、分かった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげていると回答している割合が高く、授業や家庭学習で振り返りが行われている様子がうかがえます。その一方で、小・中とも放課後や週末に家でテレビや動画を視聴したり、ゲームをしたり、SNSを利用したりしている割合が高く、特に中学校では、家での決まりを守って携帯電話・スマートフォンやコンピュータを使うことに課題が見られます。

令和5年度の調査については、国語、算数・数学、英語（中学校のみ）の3教科及び児童生徒質問紙について悉皆により実施されます。今後も、一人一人の学びの状況を確認しながら確かな学力を育み、未来に向かってたくましく生きる力を身に付けさせることができるように、児童生徒に寄り添った指導の充実が一層期待されます。

全国及び秋田県の平均正答率一覧（今年度も、県の平均正答率は整数値で発表されています）

	〈小学6年 平均正答率〉			〈中学3年 平均正答率〉		
	国語	算数	理科	国語	数学	理科
秋田県	71	66	71	73	54	52
全国	65.6	63.2	63.3	69.0	51.4	49.3

小学校国語について

領域ごとの正答率を比べると、4領域で全国平均を上回っていますが、「読むこと」については全国平均をやや下回っています。また、「言葉の特徴や使い方に関する事項」や「我が国の言語文化に関する事項」は、正答率の高い設問が多く、基本的な言語能力の定着が見られます。

「読むこと」の「叙述に基づいて行動や心情を捉えること」、「書くこと」の「感想や意見を伝え合い、自分の文章のよいところを見付けること」については課題が見られますので、指導を一層充実させる必要があります。

【叙述に基づいて行動や心情を捉える】

登場人物の心情は、行動や会話、地の文などの叙述と結びつけて捉えることが必要です。授業においては、複数の叙述に基づいて登場人物の心情や行動を捉えるといった学習活動を行う際、「なぜそのように考えたのか」を明らかにするよう指導することが大切です。また、個の考えを交流する活動を設定すると効果的です。

中学校国語について

領域ごとの正答率を比べると、全ての領域で全国平均を上回っています。特に、「書くこと」の正答率は全国より約10ポイント上回り、根拠に基づいて自分の考えをまとめて書く力の定着が見られます。

「言葉の特徴や使い方に関する事項」の「表現の技法について理解すること」、「書くこと」の「自分の考えが分かりやすく伝わるように、根拠を明確にすること」については課題が見られますので、指導を一層充実させる必要があります。

【根拠が明確になるように引用して書く】

意見文を書く際は、自分の考えが読み手に分かりやすく伝わるようにするために、根拠を明確にすることが必要です。また、考えの根拠として、複数の事例や専門的な立場からの見解を引用することなどが考えられます。

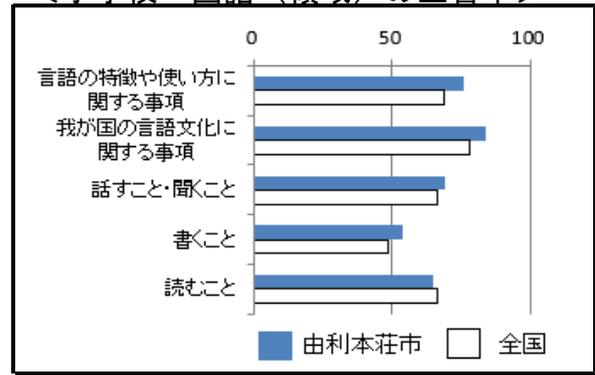
引用する部分をそのまま抜き出し、かぎカッコ（「」）でくくるといった引用の仕方について、具体的な学習活動を通して理解を深めるようにすることが効果的です。

質問紙調査から＜国語の学習について＞

国語の学習の仕方については、小・中全ての項目で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計が、全国の数値を上回っています。特に、95%前後の児童生徒が「国語の勉強は大切だ」「国語の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」、85%以上の児童生徒が「国語の授業の内容はよく分かる」と回答していることから、国語学習の有用性を大切にして理解を深められる授業実践が行われていることがうかがえます。

今後は、児童生徒の国語に対する興味・関心が高まるよう、「個別最適な学び」や「協働的な学び」の一体的な充実を図り、授業改善を進めていくことが望まれます。

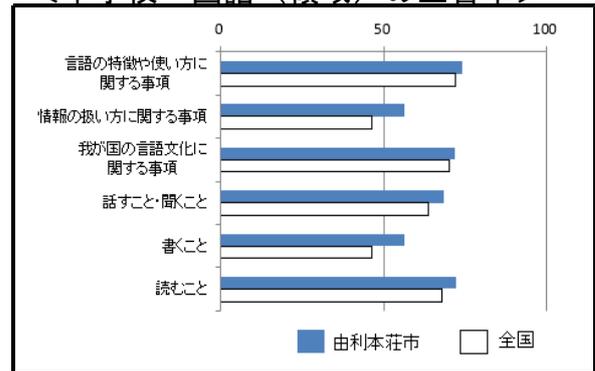
＜小学校 国語（領域）の正答率＞



【交流を通して自分の文章のよさを見付ける】

ペアなどで感想や意見を伝え合う経験を積み重ね、自分の文章のよいところを見付けたり、それを言葉で表現したりすることが大切です。その際は、適宜教師が伝え合いに参加し、児童がそのように書いた意図を相手に伝えたり、具体的な表現や語句を挙げながら感想や意見を伝え合ったりすることができるよう指導すると効果的です。

＜中学校 国語（領域）の正答率＞



【表現技法について理解する】

文学的な文章を読む際は、文章の内容を伝えたり印象づけたりするために、表現がどのように働いているかを考えることが大切です。特に、表現の技法については、名称や用法を理解した上で、話や文章の中で適切に使用することが求められます。

表現の技法が用いられている文と使われない文を比較することを通して、その効果や特徴を確かめる活動を設定することも効果的です。

小学校算数について

平均正答率を見ると、4領域すべてで全国平均より高い数値を示しており、また、観点別、問題形式別を見ても、すべて全国平均を上回っています。

「変化と関係」の「数量が変わっても割合は変わらないこと」、「図形」の「図形の構成について考察・理解すること」については課題が見られますので、指導をより一層充実させることが必要です。

【数量の変化と割合の変化を考える】

飲み物の量が $1/2$ になると、果汁の割合も $1/2$ になると判断したと考えられる誤答が多く見られました。

飲み続けて量が減るほど味も薄くなることになり、児童に実感をもたせることも有効です。また、問題文の読み取りとして、飲み物の量が $1/2$ になると果汁の「量」も $1/2$ になると捉えたとも考えられ、問題文を丁寧に読む指導も大切です。

中学校数学について

平均正答率を見ると、4領域、観点別、問題形式別のすべてで全国平均より高い数値を示しており、特に「数と式」の領域では、全国平均を10ポイント以上上回っています。

「データの活用」の「ヒストグラムや箱ひげ図の特徴を読み取ること」、「図形」の「筋道を立てて考え成り立つ理由を説明すること」については課題が見られますので、指導をより一層充実させることが必要です。

【ヒストグラムを比較して説明する】

ヒストグラムの特徴から、適切な代表値を読み取れていないようです。

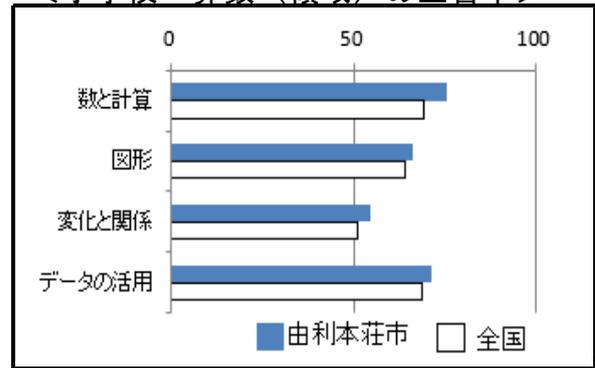
選んだ根拠を問われているので、生徒全員が「Aを選ぶとき」「Bを選ぶとき」の両方の視点で考察する場面を設定することも、ふさわしい代表値を考えるために有効です。複数の根拠を組み合わせより説得力の高い説明ができたときなど、教師が適切に価値付けることも大切です。

質問紙調査から〈算数・数学の学習について〉

算数・数学の学習への意識や取組については、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」の合計が、小・中ともにすべての設問において全国の数値を上回っており、望ましい状況が継続しています。しかし、「数学の学習を普段の生活で活用できないか考えている」という設問については、小学校で86%、中学校で63%と開きが大きい状況です。授業においても、学習内容を身の回りの事象と関連させるなど、数学の有用性を実感させることが大切です。

今後の授業づくりでは、ICT機器を有効活用することで、主体的・対話的な学び、個別最適な学びへとつながる授業改善を継続することが求められます。

〈小学校 算数（領域）の正答率〉

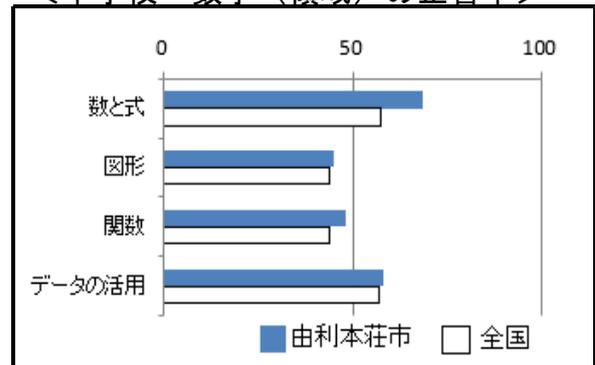


【図形の性質を基にかく手順を説明する】

プログラムの命令と、描かれる図形の関連がうまく捉えられていないようです。

実際に図を指でなぞって確認することで、辺の長さや角の大きさ等の必要な数量と、それらが登場する順番を明確にすることが大切です。辺の長さや図形などの条件を変えた類題を、段階的に難易度を変えて複数出題することも、児童の学習意欲を高め、理解を深めるための有効な手段です。

〈中学校 数学（領域）の正答率〉



【事柄が成り立つ理由を説明する】

証明では、記述する前に図の中に印を付け、視覚的に条件や手順を確認して見通しをもつことが重要です。

また、例えば三角形の合同を示す証明の場合でも、全体の記述にこだわらず、「仮定以外に等しい箇所」の説明部分を一部抜き出し、焦点を絞って記述する問題を取り入れるなど、多様な出題方法を通してねらいを明確にすることもできます。

小学校理科について

領域ごとの調査結果を比べると、4領域とも全国より高い平均正答率を示しています。中でも、「粒子」「地球」の領域で高くなっています。特に、観察・実験から得られる結果を見通して問題解決の道筋を構想する問題や、実験器具の名称を問う問題で高い正答率を示しています。一方、前回調査の結果と同様に、器具の正しい使い方を身に付けたり、観察・実験の結果を分析したり解釈したりする力の育成を図る必要があります。

【器具類の適切な操作方法の習得】

観察や実験をする際に、使用する器具類の名前や活動の手順を確認するだけではなく、「なぜそうするのか」など、使用する意図や操作の意図を明確にする必要があります。また、なるべく多くの児童が実際に操作する経験を積むことができるように、備品の整備や消耗品の補充について、計画的に進めていくことが重要です。

中学校理科について

領域ごとの調査結果を比べると、2領域で全国より高い平均正答率を示しましたが、「粒子」「地球」領域は全国と同程度でした。特に、適切なグラフを選択したり、理由や考えを記述したりする問題で全国よりも高い正答率を示しています。

今後の指導に当たっては、知識の確実な定着や、生徒自身が探究の過程を見直し、必要に応じて改善していく力の育成を図る必要があります。

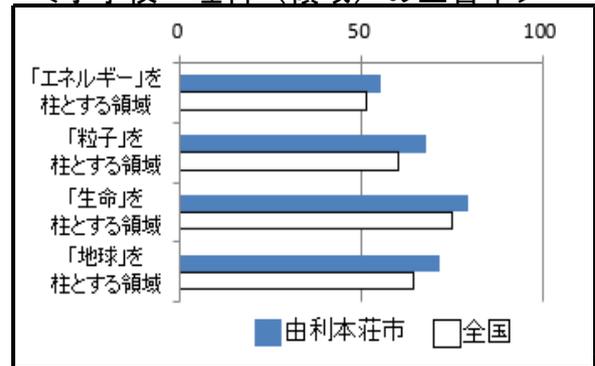
【知識・技能のより確実な定着】

知識を生かして考える問題の正答率が低い傾向が見られました。学習を通して知識を身に付けるとともに、それを身の回りの物や事象と関連付けて考え、表現する活動をなるべく多く取り入れるなど、学んだことを捉え直す機会を重視することで、知識や技能のより一層の定着を図ることが大切です。

質問紙調査から＜理科の学習について＞

「理科の勉強が好き」と回答している割合が、全国に比べて小学生では10ポイント、中学生では15ポイント高くなっています。「理科の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」では、全国に比べて小学生が16ポイント、中学生が20ポイント上回っています。また、「理科で学習したことは社会に出たときに役立つと思う」については、全国に比べて小学生が10ポイント、中学生が16ポイント高くなっています。各校において、児童生徒の主体的な活動を重視した授業づくりをしたり、学習内容と日常生活との関連を図ったりするなどの工夫がなされていることが、よい結果につながっていると考えられます。

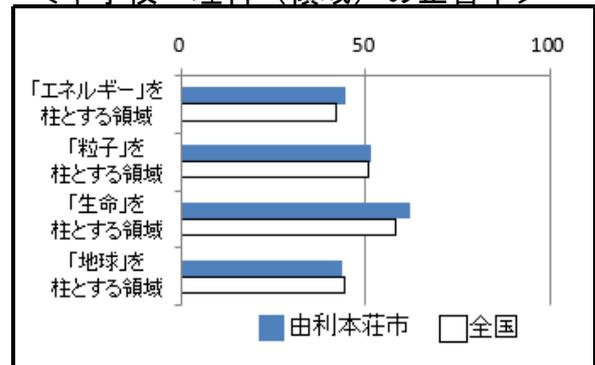
＜小学校 理科（領域）の正答率＞



【結果を考察する力と、より妥当な考察を導く活動の充実】

観察や実験の結果を表やグラフなどに整理し、規則性などを明らかにする場を大切にする必要があります。また、あらかじめ個人で考察し、グループや全体などで互いに検討する場を取り入れるなど、考察を見直しながらより妥当な考えにしていく活動を、一層充実させる必要があります。

＜中学校 理科（領域）の正答率＞



【実験計画や考察の妥当性を検討・改善する力の育成】

考察が課題に正対しているかどうかを検討し、必要な実験を指摘する問題の正答率が伸び悩みました。生徒どうしの話合いを通して、実験計画や考察の妥当性を再検討する場面を設定するなど、必要に応じて実験の方法や条件の制御を見直ししていく活動を大切にする必要があります。

児童生徒質問紙について

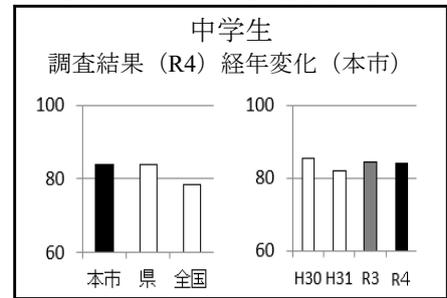
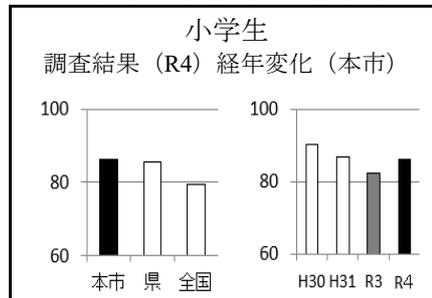
質問紙調査は、小学校、中学校ともに75項目あり、学習習慣、生活習慣等幅広く質問されています。その中で注目すべき項目や今後に生かせる項目について掲載しました。なお、この調査では本市の小学校6年生485名、中学校3年生534名が回答しています。

1【自分には、よいところがあると思いますか】

質問番号(7)

《当てはまる、どちらかといえば、当てはまる割合》

継続的に本市の課題とされてきた項目ですが、今年度、小学生は86.2%が「自分にはよいところがあると思う」と回答しており、昨年度よりも高くなっています。中学生は、83.9%と昨年度よりやや下回っているものの、県平均並みを維持しています。これは、道徳教育や体験活動の充実、各教科における授業改善等の成果と思われる。今後も、学校生活全体を通して、児童生徒が活躍する場を意図的に設定することで、互いのよさを認め合いながら、児童生徒個々の自己有用感をさらに高めることができるよう支援を継続していきたいと考えます。

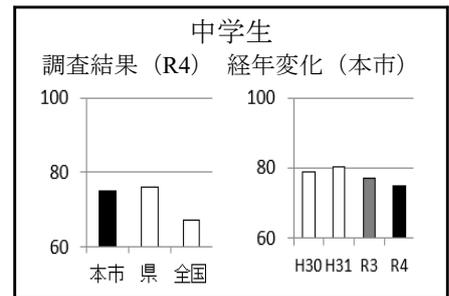
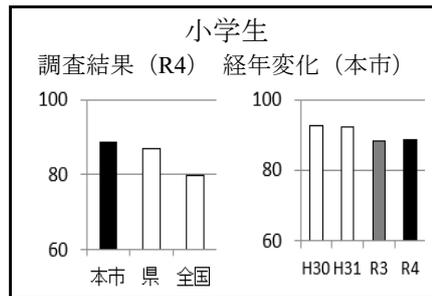


2【将来の夢や目標をもっていますか】

質問番号(9)

《当てはまる、どちらかといえば、当てはまる割合》

小学生の84.4%、中学生の75.1%が将来の夢や目標をもっています。小・中学校ともに全国平均を大きく上回っていますが、経年変化で見ると低くなっています。昨年度と同様に、新型コロナウイルス感染症の影響により、職場体験をはじめとするキャリア教育に密接に関連する行事等が、中止あるいは規模縮小を余儀なくされた影響もあるのではかと感じます。今年度は、少しずつ多くの活動が再開されたり、方法を工夫して実施されたりしていますので、その中で自己肯定感や自己有用感を醸成するとともに、将来について考える機会を意図的に設定し、指導していくことが必要であると考えます。

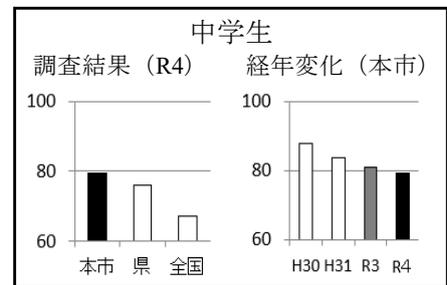
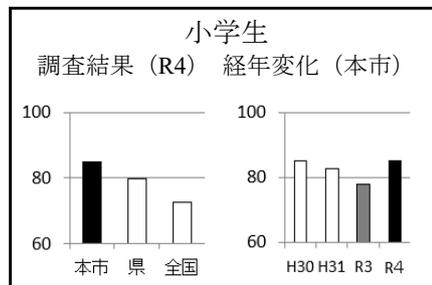


3【難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか】

質問番号(11)

《している、どちらかといえばしている割合》

難しいことでも失敗を恐れずに挑戦している児童生徒の割合は、小学校が84.9%と県平均を上回り、昨年度と比較しても高くなっています。コロナ禍で学習活動に様々な制限がある中、課題解決に向けて粘り強く取り組む力が高まっていると捉えられます。中学校は、経年変化を見るとやや低い結果となっていますが、79.3%の生徒が挑戦していることが分かりました。全国平均と県平均を大きく上回っています。今後も、工夫しながら児童生徒が積極的に力を試す機会や新しいことに取り組む場を確保するとともに、失敗を受容する学級の雰囲気づくりや、挑戦する姿勢に対する励ましを大切にしたいと考えます。

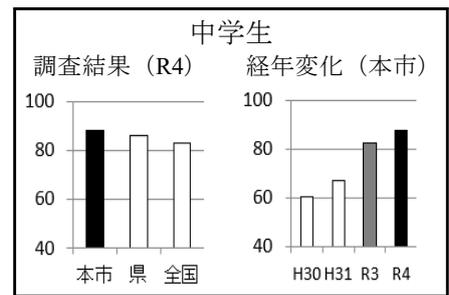
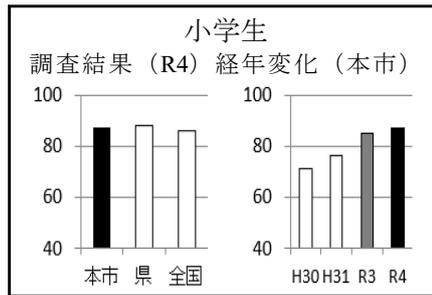


4 【学校に行くのは楽しいと思いますか】

質問番号（16）

《当てはまる、どちらかといえば、当てはまるの割合》

小学生の87.0%、中学生の87.8%が学校に行くのは楽しいと感じています。小学校では、県平均を少し下回りましたが、中学校では全国と県の平均を上回っています。また、経年変化を見ますと、割合が年々増加しています。これは、各校で定期的なアンケートや教育相談の実施を通して、適切に個々に対応し、児童生徒に寄り添う指導を心がけた成果であると捉えています。さらに、授業やそれ以外の様々な場面で、児童生徒が活躍し、お互いの良さを認め合う機会を設定し、児童生徒の居場所づくりに努めたことも数値が上昇している要因の一つと考えます。今後も、丁寧な見取りによる児童生徒理解と一人一人の個性を尊重する指導が求められます。

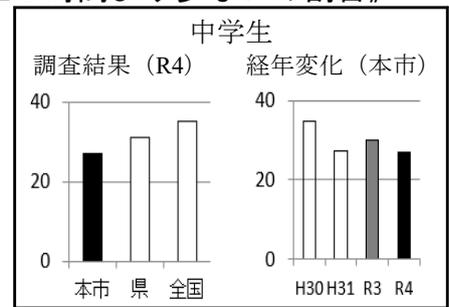
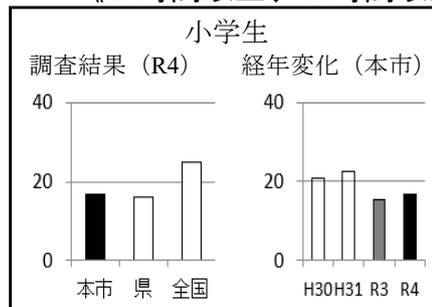


5 【学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間、インターネットを活用して学ぶ時間も含む）】

質問番号（21）

《3時間以上、2時間以上3時間より少ないの割合》

授業以外で2時間以上学習している小学生の割合は16.7%、中学生の割合は26.9%でした。経年変化を見ると、小学校では昨年の数値より上回り、中学校では下回っています。また、平成30年度から数値は下降傾向にあります。この結果は、家庭でのテレビゲーム、SNSや動画視聴の時間等と関係があると考えられます。今回の調査では、普段テレビゲームを2時間以上する小学生の割合は46.4%、中学生の割合は40.2%、2時間以上SNSや動画視聴をする小学生の割合は25.3%、中学生の割合は41.2%という結果でした。児童生徒に家庭での学習を振り返る機会を設定するとともに、保護者に家庭での過ごし方について協力を呼びかける必要があります。

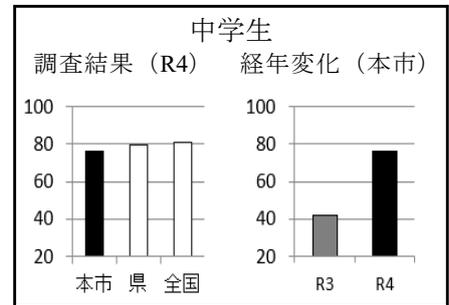
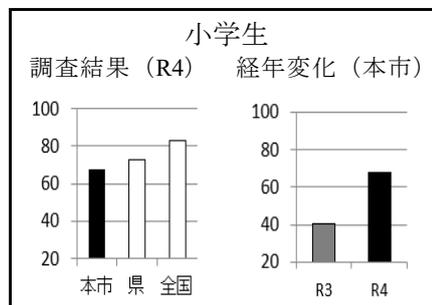


6 【5年生までに（1・2年生のときに）受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか（R3からの質問事項）】

質問番号（32）

《ほぼ毎日、週3回以上、週1回以上の割合》

小学生の50.5%、中学生の76.2%が昨年度まで受けた授業で、週1回以上ICT機器を使用したと回答しています。この項目は昨年度から質問されていますが、今年度はどちらの校種でも数値が大幅に上昇しています。昨年度、全小・中学校にタブレットを配布し、様々な研修会でICT機器の効果的な活用事例を提示し、各校で研究主任や情報教育担当を中心に積極的に活用を推進した結果であると考えられます。また、PC・タブレットの使用と捉えて回答した児童生徒もいると予想され、電子黒板や書画カメラ等の使用を含めると、実際にはこの結果よりも高い数値になることが推測されます。



カメラ機能を用いて写真や動画を撮影して見直したり、インターネットで検索したり、発表の場面で資料を提示したりする場面では、多く活用されていますが、さらに効果的な活用ができるよう情報提供したり、演習したりする機会を研修会等で設定したいと考えています。